



続 謙澄を巡る人々

題字 棚田看山

その1

謙澄を巡る人々を語る時、福地源一郎（号は桜痴・一八四一〜一九〇六年）は外せない。

肥前（長崎）に生まれ、当地で蘭学を学ぶ。江戸に出て森山塾で英学を学び、江戸幕府に出仕して通訳や翻訳の仕事に携わる。二度の渡欧（一八六一・一八六五年）を経験し、演劇や新聞に深く関心を持つようになる。

明治維新後、渋沢栄一の紹介で伊藤博文と知り合い、一八七〇年招かれて大蔵省に出仕する。この年、伊藤の渡米に随行し、翌年には岩倉使節団の一員として四度目の海外を経験する。桜痴は維新の元勳たちと交わり、その才能を大いに認められた。

ところが、政府内の不和により、一八七三年渋沢らが野に下り、翌年桜痴も大蔵省を去ってその年十二月、「日報社」の主筆（のち社長）として入社する。そこに謙澄がいた。



謙澄は、高橋是清と始めた翻訳の仕事が縁で日報社に入社し、健筆をふるっていた。そこへ名うての大物桜痴の入社である。「俺なんぞ、もう要らなくなる」と謙澄のシヨックはかなりのもので、それをなだめたのは

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

福地源一郎（桜痴）

～末松謙澄を伊藤博文に紹介～

清。しかしこれは杞憂に終わり、桜痴は謙澄の才能を見抜きかわいがり、重く用いている。

ある日、桜痴が謙澄を連れて銀座を歩いていた時、偶然に伊藤と出会う。その頃の伊藤は、明治政府の少壮高官の参議だった。ここで桜痴は日報社社説のペンネーム笹波萍二はこの人物、豊前出身の末松謙澄だと紹介した。こうして謙澄と伊藤の公私にわたる長くて親しい関係が始まった。時に、謙澄二十歳の頃であった。

桜痴と謙澄の繋がりは続く。謙澄が英国より帰国（一八八六年）して起こした演劇改良運動にもいち早く呼応し、翌年の井上馨邸における初の天覧劇にも積極的に関わった。一八八九年には、歌舞伎座の創設を主導し、多くの戯曲や小説も残している。

福沢諭吉と並んで「天下の双福」とまで称された桜痴だが、晩年は恵まれなかったようである。一九〇六年死去、享年六十四歳。葬儀には伊藤をはじめ二十余名が参列したという。

謙澄の父房澄の墓碑には、前面に『臥雲 末松翁之墓』と伊藤が筆を執り、側面の六行にわたる墓誌には「東京福地源一郎撰併書」とある。桜痴と謙澄の縁の深さが偲ばれる。

（文化人末松謙澄を考える会 徳永文昭）